

3・11 後 を生きる

宮城県南三陸町は、町内に降るすべての雨が川を伝って志津川湾へ流れ込む地形になつており、行政範囲と分水嶺が重なる珍しい地域なのです。大正大学の学生も、昨年の夏は隣町境界の尾根沿いで実習を行いました。写真。尾根沿いは分水嶺で、かつては隣町との火防線として広く伐採され、山火事の延焼を防いだのです。この分水嶺の中で暮らす町民は、日々の暮らしによる生活排水や農業用水の汚水が、湾環境に影響し、悪化すると養殖漁業ができなくなることを認識しています。

昨年十一月二十七日の本欄でお伝えしたように、いま南三陸では、山と海をめぐる新しいプロジェクトが始まっています。世界で初めて林業・

大正大学人間学部准教授
山内明美さん

海山と生きる分水嶺の民



漁業の両方での国際認証を取得予定です。町全体を包み込む山と海の持続可能な連鎖の中で、地域資源を生かすことを目指します。農林漁業といった、海や山との関わりを生業にする人々は、自分たちが何によって生かされてきたのかを繰り返し思い起こし、語ってきました。

津波は愛する人や多くのものを奪っていきました。悲しみの時間を過ごす中で、自分たちがここに生かされてあったことに気付きました。また海と生きること、また山と生きるとは三陸の人々にとってかけがえのない喜びです。

この大事な心を次世代につなぐにはどうしたらいいか、苦悩は続きます。こうした町民の気持ちは、二〇一六年からの長期総合計画の指針に盛り込まれました。「森



れま

里海 ひといのちめぐる
まち 南三陸」。南三陸は、もつ一度、海と、山と一緒に生きることに決めました。時代や地域を超えて、世界と共有できる大事な財産になることでしょう。

南三陸の林業プロジェクトの様子が、無料BSチャンネル「BS12 トゥエルビ」の「復興支援ドキュメント 未来への教科書」で放送されます。九日午前六時三十分と十日午前二時から三十分間の番組です。ぜひご覧ください。

この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。

東北復興日記